－所蔵作品紹介－

神山　明　KAMIYAMA Akira

いつもの道に迷い込む

いつものみちにまよいこむ

作品データはこちら

人間にとって、楼閣というものを、作ったり夢想したりすることは大きな欲求なのではないだろうか。また、迷宮というものも人間の想像力を刺激する魅力的なテーマであり続けている。そして、都市計画や建築を考えるのもそれに似た面白さがありそうだ。神山明の作品には、そのような人間の心の中のパノラマを刺激する要素が多数含まれている。そこには、未知の世界を覗きこむような神秘的な感覚と、子供の頃、遊んでいたらいつの間にか廃屋の中に迷い込んでしまったという類の、不可思議な記憶を思い起こさせるようなノスタルジックな感覚が共存している。

彼の造形は、華奢で軽そうな板材による構造の土台または、家型や円形劇場のような基本形の周囲、もしくは内部に、梯子、月、星、舟形、旗、弧、球などの多様な要素を組み合わせたものである。そして、壁面、壁際、フロアー上などに設置されるさまざまな変化型を持つ。それらは、一見、少年の工作のようでありながら、豊かな造形性を持ち、小宇宙のように内へ外へと広がりつつ、見る者の想像力を刺激する。このような表現には、オイルステインで古びた茶色に着色された杉板という素材が一役買っている。素材と造形の一致によって、彼の作品はひとつの劇場となっているのである。

この「いつもの道に迷いこむ」は1989年の第20回サンパウロ・ビエンナーレに出品された神山の代表作で、上記のような彼の作風をよくうかがうことができる。彼は1953（昭和28）年、東京都生まれで、1977（昭和52）年、東京芸術大学でデザインの基礎造形及び理論の専攻を修了している。その活動は1980年代に入ってから注目されはじめ、第２回ヘンリー・ムーア大賞展（1981）で佳作賞、第７回エンバ賞美術展（1985）で優秀賞、第18回および第19回現代日本美術展（1987、89）で佳作賞、第17回日本国際美術展（1988）で佳作賞を受賞したほか、「現代彫刻の歩み」（神奈川県民ギャラリー、1990）、「作法の遊戯 - 美術の現在」（水戸芸術館、1990）、「日本近現代木彫展」（岡山県立美術館、1992）などの企画展に出品されている。個展活動も活発で、多作な作家であり、今後の新たな展開が期待できよう。

旭川美術館だより「氷華」No.35（1995.３発行）「収蔵作品から」より